

ようやく、本来の冬がやってきました。ふわふわの柔らかい粉雪。転がっても濡れない雪。身体がすっぽり埋まる雪。つららのある光景。辺り一面真っ白な世界。まさにこれが冬だ！！という情景です。10年に1度の寒さ、災害休の大雪などと言われていますが、温暖化の生活に慣れてしまっただけに、こんな大雪は、珍しくなったということでしょう。

大地が開園した当初は、大地入り口の電柱にある看板のののはな文庫あたりまで雪が積もる冬がありました。ブルドーザーもなく、除雪機で道をあけ、駐車場も除雪機でかいていたのが、懐かしい思い出です。大地は、当時は園舎しかなく、まだ周囲はリンゴ畠だったので、除雪も単調でしたが、細々した建物が多くなるにつれて、複雑な除雪が必要になり、今に至っています。その分、子どもたちの除雪作業が多くなり、それも楽しみです。今朝、再読している中村桂子さんの本に、子どもの生活が 労働 遊び 学習の一体化したものでなくなつたとありました。本来、自然にはたらきかけて生活に必要なものを生産するための労働、その時に必要なノウハウを伝えていくための教育、それらの間で気晴らしとなる遊びというわけです。

まさに、大地の子どもたちは、こんな感じの生活をしていると思います。(身近では、青山家の長男家族を思い出して頂ければわかりやすいかも)

あつという間に、今年も一ヶ月が過ぎます。夕方5時を過ぎてもまだ明るいし、夜明けも6時過ぎには、薄明るくなっています。クリスマスや冬至がなぜ嬉しいかと言うと、これを境に、光が多くなるつまり昼間が増えていくという理由だそうです。そして、光を浴びて、暖かいエネルギーで活力ある生活ができるからでしょう。うれしくて寝ていられない、早く起きて遊びたい、こんなエネルギーに満ちた子どもたちにぜひ育ってもらいたいと願います。それには、もちろん大人の導きは必要です。それは春を待ちながらのこの季節にこそ、根性と忍耐とそれのご褒美としての真の喜び 楽しさがやってくると思います。

「子どもは風の子 元気な子」昔からのありきたりな言葉ですが、高気密な家に住み、高品質な衣類を着て、贅沢な食事をしての暮らしでは、守られた受け身の心身しか育ちません。親としては、どんな心身をプレゼントすることが真に大切かつ重要なのかを考え暮らしていきましょう。



【ヘンリー・ディヴィッド・ソロー】

年末年始に アメリカの思想家 森の生活者 ソローの「孤独の愉しみ方」を読んでみました。自然や山や森に住んでみたい人や憧れている方なら、一度は聞いたことがあると思います。そんなソローの名著「森の生活」をわかりやすく、155の名言集として、編集されたのが、この本です。とてもわかりやすく、どのページを開いても、生き方、心にヒットする名言が書かれています。自分自身にヒットした名言を、少しあげてみます。

- ①No. 5 「みんな」という言葉に惑わされてはならない。「みんな」はどこにも存在しないし、「みんな」は決して何もしてくれない。解説は略
- ②No. 9 読書とは、高貴な知的訓練をすることである。偉大な詩人たちの作品は、まだ人類によってまともに読まれたことがない。なぜならば、それを読むことができるるのは、偉大な詩人だけだからだ。そうした作品は、これまで大衆が星を読むように、いわば天文学的にではなく、せいぜい占星術的にしか読まれてこなかった。高貴な知的訓練としての読書についてはほとんど、いや、何もわかっていない。贅沢品のように僕たちを心地よくさせ、高度な能力をしばらく眠らせておくものではなく、読むためにつま先立ちもいとわず、最も集中力のある頭のはっきりした時間をあてざるをえないもの、それこそ読書だ。
- ③No. 22 野性味を持った人間を友に持ちたい。友人や隣人には、飼いならされた人ではなく、野性的人は人がいい。善人や恋人同士でも、ぶつかり合った時にはすさまじい野性味を發揮するもので、それと比べたら野蛮人の荒々しさなど、ささやかな象徴にすぎない。
- ④No. 36 (青山家今年の目標) 最高の芸術は、その日の生活の質を高めることである。人間には、意識的な努力によって自分の人生を高める能力が間違いなく備わっているということほど、励みになる事実はない。素晴らしい絵を描いたり像を彫ったりして、美しい作品を生み出せるというのは素晴らしいことだ。けれども、僕たちの周囲に満ちていて、何かを見る媒体となる空気そのものを彫ったり、描いたりすることのほうが、遙かに偉大であり、人間はまちがいなく、それができるのだ。その一日の質を高めること、それこそが最高の芸術なのである。
- ⑤No. 37 (おおぞらさんに捧ぐ) 生きる術は、自分で見つけ出さなくてはならない。その術は経験から生まれる。例えばもし僕がある少年に一般教養を学ばせたいと思ったら、単に近隣の教授のもとへ連れて行くというありきたりのやり方は取らない。そこではあらゆることを教え、練習させてくれるだろうが、生きる技術は教えてくれない。自分の目ではなく、望遠鏡や顕微鏡を通して世界を眺め、化学の勉強はしてもパンの作り方は習わず、機械学は勉強しても、どうやって暮らしを立てるかは教えてくれない。
- ⑥No. 52 知性を持ちなさい。それも、いつまでも腐らない知性を。氷は観察の対象として興味深い。ルッシュ湖の氷室には、5年間保存されている氷があるが、全く劣化しないそうだ。バケツに入れた水はすぐに腐敗するのに、凍らせた水はなぜいつまでも悪くならないのか。一般に、それは愛情と知性の違いだと言われている。
- ⑦No. 76 娯楽を楽しむ。そのために仕事をする。多くの人は、静かな絶望を感じつつ人生を送る。絶望が常態化したものをあきらめと呼ぶ。多くの人が陥っているながら、自覚していない絶望は、俗に競技や遊戯と呼ばれているものの中にさえ潜んでいる。だから、そうしたものの中に娯楽の要素はない。なぜなら、娯楽は仕事をやりとげてこそ味わえるものだからだ。(本当の楽しみは、楽なことではないことの後にやってくる 大地)
- ⑧No. 97 硬くなった手のひらに触れられると、胸が高鳴る。労働者の硬くなった手のひらは、怠け者のだらけた指よりも、自尊心と勇敢さを醸し出す精巧な組織につながったおり、触れられると胸が高鳴る。経験によって日焼けもせず、皮膚も硬くならず、昼間から寝床の中で青白い顔で考え事をしているのは、ただの感傷にすぎない。
- ⑨No. 101 詩ははどこから生まれるか。それは自分の手で家を建てることからである。鳥に自分の巣を自分でつくる適性が備わっているように、人間にも自分の家を建てる適性が備わっている。人間が自分の手で家を建て、自分と家族に必要なだけの食べ物を実際に運んでくるなら、そんな暮らしをしている鳥たちがあまねくさえずっているように、人間にもあまねく詩的な才能が芽生えるのではないかろうか。
- ⑩No. 123 / 124 朝を大切にしなさい。朝は活力をくれる。心の中にいつも夜明けを待つ。常に朝の気持ちでいる。太陽とともに、しなやかで活力に溢れた考えを進める人にとって、一日はずつと朝なのだった。時計が何時を指そうが、人々が何をし、仕事を始めたり終えたりしようが関係ない。僕が覚醒している間はずつと朝であり、夜明けは僕の内にある。
- ⑪No. 35 破れた服を着たって、何一つ失うものはない。つぎのあたった服を身につけているからといって、僕は人を見下したりしない。だが、一般に人は、健全な良心を持つことよりも、流行の服、あるいは少なくとも清潔でつぎにあたっていない服を身につけることにずっと心をくだくようだ。しかし、たとえ綻びが繕われていない服をみにかけていたとしても、それが示すその人の性質は、最悪でも不注意ぐらいのものだろう。(自分)